

〔東海道名所圖會五〕田子浦 田籠あるひは田兒とも書す、都て清見興津よりひがし、浮島原迄の海邊の總號なるべし。

〔笈埃隨筆二〕一田子の浦は、昔しの街道なりしが、親不知とて、高山岩石屏風の如く、磯邊は波高くして、しばしも止事なし、其波の引間に走り通り、一騎打にて行人路を顧るいとまなく、明暦元年の秋、半腹を切ひらきて往來とせり、故に今誠の田子の浦を知る人なし、

〔續歌林良材集上〕するがの國の風土記に云、廬原郡不來見の濱に、妻をおきてかよふ神あり、其神つねに岩木の山より越て来るに、かの山にあらぶる神の道さまたぐる神ありて、さえぎりて不通、件の神あらざる間をうかゞひてかよふかるがゆゑに來ることかたし、女神は男神を待とて、岩木の山の此方にいたりて夜々待つに、まち得ることなれば、男神の名よびてさけぶ、よりてそこを名付て、てこの呼坂とすと云々、てことは東俗の詞に、女をしてこといふ、田子浦も手子の浦なり、

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年四月三日辛酉、戌刻大地震、南風由比浦大鳥居内拜殿被引潮流失、著岸船十餘艘破損、

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年八月廿七日甲戌、申刻以後風雨、入夜大風、由比浦船舶沒、彼死人寄河、彼是不可勝計、

〔木曾路名所圖會五〕霞浦行方郡に屬し、箕幡江の中也、又香澄とも書す、○中略

ゆく川の水はたえずして、もとの水にあらず、此浦をながめてなを船に乗て行ば、紅日漸生じて雲は錦繡の色をなし、樹々ははるかに彩畫を見るに等し、日夜の潮聲幾たびか去來し、古今の山色たゞ濃淡あり、老子曰、江海の所以は能百谷の王たり、其能下るのゆへをもつてす、舷に昇て見れば、魚の波の上に踊る、これなん莊子の魚樂を論じて、又おのれが樂しみとす、こゝは我國のひ

由比浦
相模國